

日本のスキー技術の変遷とカービングスキー

Transition of skiing techniques of Japan and carving ski

1K05B192

指導教員

主査 石井昌幸先生

東村 八千代

副査 吉永武史先生

日本では1997年頃からカービングスキーが普及するようになる。カービングターンは今まで一部の上級スキーヤーのみが体験できるとされてきたが、カービングスキーはカービングターンをより楽に実現可能にすることができる。カービングスキーによるカービングターンは今までのスキーによるターンのメカニズムと異なり、技術も大きく変わり、それに伴い日本スキー教程の技術形態、指導方法も変わってきた。また、スポーツの発展は、高度化が進み優秀選手の活躍が注目されると大衆化が刺激され、大衆化が進み底辺が拡大すれば優秀選手が輩出され、高度化が促進するというサイクルでなされてきた。しかしアルペンスキーは競技スキー技術の頂点はその時の技術の先頭を行き、技術が高度化しても、スキーヤーの人口の推移は1993年にピークを迎え、それ以降は急激に減少し、カービングスキーが登場してからも減少は続いている。

そこで本論文の目的は、各年のスキー教程の技術形態と特徴を、カービングスキーが登場してからのスキー教程と比較し、削除された技術と変わらない技術、新たに加わった技術や考え方を明らかにし、カービングスキーの登場とカービングスキーのあるべき方向性を提案することである。

本論文では、『スキー教程』(1965)『日本スキー教程』(1980、1986、1994、2003)を参考にし、技術の変遷を追った。第3章では主に『日本スキー教程』(2003)、『カービングターンの科学』、『日本人のスキー革命』、『月刊 SKI journal』を参考にした。

第1章では1965年、1980年のスキー教程か

ら技術形態や教程の特徴を明らかにした。1965年の教程では、のちに見られる指導形態の表のようなものがなく、指導の展開の順序としてではなく技術と指導方法が写真と共に細かく説明されている。1980年の教程ではジャンプ・ターンにみられる飛躍技術に重点を置かれている。この教程ではのちにみられるベンディング動作の原型と思われる内容が含まれている。

第2章では1986年、1994年のスキー教程をみていった。1986年の教程ではコブ技術についての解説がより深くなっている。カービングターンという語も出てくる。

1994年の教程ではシュテムターンが消えていることに気付く。この教程は日本のスキー技術の一人立ちと言われている。

第3章では、カービングスキーについて現在の教程と参考文献をみていった。2003年の教程では、テールコントロール、トップ&テールコントロール、トップコントロール、内スキー主導、両スキー主導、外スキー主導など、新しい言葉で解説している。人間のエネルギーがターン運動に必要な自然の物理運動のエネルギーを導き出し、自然のエネルギーがスキーにターン運動のエネルギーを与えるというスキー技術の考え方、スキー技術の「原因」と「結果」という考え方も新たな内容である。カービングスキーは、カービングスキーを乗りこなすこと、性能を引き出すことが目標となっている。そのためには、テールコントロール、トップ&テールコントロール、トップコントロールをうまく使い分けて、滑る必要がある。これまでの教程をみることにより、新たなスキーの性能やメカニズムを発見

できたように思う。このことは実技としてのスキーを行う場合、指導者が学習者にイメージを伝えることは大変なことであり、学習者は理解に苦しむこと

が多いが、よりスキーのメカニズムを理解し分かりやすく説明する手助けとなると考えられる。